

サイボーグ昆虫、フェロモンを追う

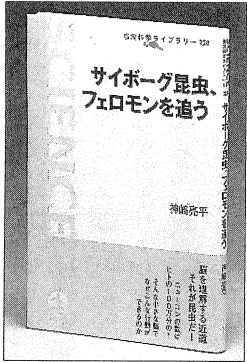
神崎 亮平(著)

敗戦とハリウッド 占領下日本の文化再建

昆虫は、地球上で最も繁栄している種である。いわば、神の手で開発され、自ら進化・適応した完全なサイボーグ。その「最新型」が、そこにいる。唐突なほど自然に、静かに。昆虫にぎよっとする人が多いのは、もしかしたら「彼ら」が、あまりに完全形だからではないだろうか？

昆虫内部をさぐる前に、著者は驚きの世界に私たちをいざなってくれる。すなわち、「私たちが昆虫になったなら、その体感はどうなのか？」を、体験させてくれる。こうした想像力と描写が、本書の大きな魅力のひとつだ。昆虫のサイズになったなら、空気はまるで「蜜の中」にいる「ように重く粘りがあるもの」という。その中を、彼らは歩き、飛ぶのだ。

また昆虫は、ある意味で我らより賢い。どんな生物より地球や植物たちとの共生の仕方を知っている。人にもあまり愛されないかもしれないが、この惑星の、尊敬を払うべき



「完全形生物」の驚異的世界

はるか先住民。彼らに学ぶべきことは、あまりに多い。

著者が「師」とも仰いだのは、カイコガのオスである。わずかに米粒一つほどの脳、口もなく、羽は飛べない。羽化すると、メスの出すフェロモンを感じし、場所を特定して到着するだけの個体。しかし、どんな邪魔をしようとすのつど適応して、フェロモンの場所へと到達する。

筆者はカイコガの神経活動をつぶさに計測し、神経回路モデルをコンピュータに構築し、それをロボットに接続する。世界に類を見ない、探索・救助ロボットとなるかもしれない。それだけでなく、カイコガの脳自体をロボットに接続して、まさに世界初の「サイボーグ昆虫」をつくったりもする！

ワンダーと叡智と謙虚さにあふれた本。著者は、昆虫たちが、この先も人類がこの星に住み続けられるテクノロジーを教えてくれる——そんなふうに、昆虫に目と耳と知性を傾けているように見える。

評・赤坂 真理

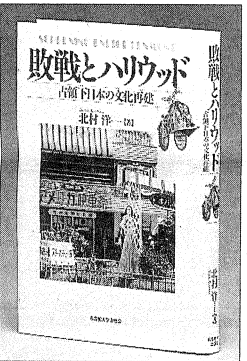
作家

岩波科学ライブラリー・1296円／かんざき・りょうへい 57年生まれ。東京大学先端科学技術研究センター副所長。

ハリウッド映画は、米国が第2次世界大戦で打ち負かした日本に、「良きアメリカ」を埋めこみ、そのパワーの傘下へと導く装置となった。

本書は、戦勝国から押しつけられたともいえる映画が日本社会に歓迎され、浸透していった歴史を多面的につづる。事例として、ヒッチコック監督の作品やゲリー・クーパー、エリザベス・テイラーらが出演した懐かしい作品が数多く登場する。映画好きにはとりわけ興味がそえられる占領の外交史であり、文化、社会史となっている。

連合国軍による占領(1945〜52年)の約7年間で、ハリウッドが配給した長編映画は600本を超える。民主主義を教育し、啓蒙するため注意深く選ばれ、検閲された。たんなる娯楽を超えて、民主、人権や自由など米国が掲げる価値観を滲ませた。政界の腐敗に触れた作品は「見習うべき米国の民主主義が不当に描かれている」と上映が



米国映画浸透の歴史 多面的に